

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：33921

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01934

研究課題名(和文) 女性研究者の仕事と私生活における役割間の葛藤と相乗効果に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Conflicts and Synergies between the Roles of Female Researchers in Work and Personal Life

研究代表者

篠原 さやか (Shinohara, Sayaka)

愛知淑徳大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：90618224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に家族形成期にあたる女性研究者へのインタビューおよびアンケート調査を通して、仕事・研究と私生活の役割間の葛藤に対して行う対処行動、および役割間の葛藤と相乗効果を明らかにした。はじめに、育児中の女性研究者が仕事・研究と私生活を両立させるために、自身や配偶者の親からの育児への支援が重要な要因になり得ることがわかった。また、女性研究者は、男性研究者にくらべて、仕事・研究と私生活での役割間での葛藤を経験しやすいが、同時にそれらにおける相乗効果も経験していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、研究者としてのキャリアの初期段階と私生活における家族形成期が重なることにより、特に女性研究者が仕事・研究活動と私生活を両立させるためにさまざまな対処をしていることが明らかになり、若手研究者への組織的な支援の重要性が示されたことは社会的意義といえる。また、女性研究者が仕事・研究と私生活での役割間での葛藤を経験するとともに、それらにおける相乗効果も経験していることを明らかにできたことは学術的意義といえる。

研究成果の概要(英文)：Through interviews and questionnaires with female researchers who are mainly in the family formation period, this study clarified their coping behaviors toward conflicts between work/research and private life roles, as well as the synergistic effects of inter-role conflicts. First, I found that support for child care from their own or their spouse's parents can be an important factor for female researchers who are raising children to balance their work/research and personal lives. It was also found that female researchers are more likely to experience conflicts between their work/research and private life roles than male researchers, but at the same time they also experience synergistic effects among these roles.

研究分野：家族社会学、ジェンダー

キーワード：女性研究者 キャリア形成 ワーク・ライフ・バランス ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

わが国の研究職に占める女性の割合は、年々増加しているものの、本研究を計画し始めた 2017 年時点で 15.7%にとどまり、主要国と比較して低い水準にあった(内閣府、2018)。特に自然科学系領域で女性研究者が増加しない原因として、在学中や入職後に研究職としてのキャリアから次第に退出する「パイプラインの漏れ(Leaky Pipeline)現象」があり、その背景には仕事・研究活動と私生活の両立の困難さがあることが指摘されている(Blickenstaff, 2005)。

人が、複数の社会的役割を担うことは、役割間の葛藤をもたらす、生活の質を低下させるといわれることがある(Greenhaus & Parasuraman, 1999)。ワーク・ファミリー・コンフリクトとは「家庭内での役割のために、仕事上での役割が十分に果たせていない」といった状況を指す。一方、2000 年頃からの研究では、仕事と私生活にはポジティブな関係性もあるとされ、それを示す複数の概念が提唱されている。そのうち、本研究が着目するワーク・ファミリー・エンリッチメントは「家庭内の役割における経験が、仕事上の役割における経験の質を高めること」を表す(Greenhaus & Powell, 2006)。仕事と私生活の役割間で葛藤をかかえやすいとされる女性研究者にとって、そのような相乗効果を経験することは、研究職としての「パイプラインからの漏れ」を抑制し、キャリア形成にとって重要な影響をもたらすのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、女性研究者の仕事・研究と私生活における役割間の葛藤と相乗効果を同時に捉え、その関係性を検証することを目的とした。本研究では、大学やその他の研究機関に所属し、一般的に家族形成期にあたる年齢層の女性研究者に焦点をあて、仕事と私生活の役割間の葛藤に対して、どのような対処(コーピング)を行っているのか、葛藤をかかえやすいとされる女性研究者にとって、仕事と私生活の役割間における相乗効果の経験はキャリア形成にどのような影響を及ぼすのか、という 2 つの問いについて、インタビュー調査とアンケート調査をもとに明らかにしようとした。

3. 研究の方法

はじめに、主に家族形成期にあたる女性研究者に対するインタビュー調査をスノーボール方式で展開した。結果の比較を目的として、少数の男性研究者への調査も実施した。その後、インタビュー調査から得られた知見をもとに、20 歳代から 50 歳代までの大学・研究機関に所属する男女研究者を対象としたオンラインによるアンケート調査を設計・実施した。本調査から得られたデータを分析し、国内外の学会で発表するとともに、論文としてまとめた。

4. 研究成果

(1) 主に家族形成期にあたる女性研究者に対するインタビュー調査を実施し、仕事・研究活動と私生活においてどのような葛藤を経験しているのか、また、葛藤を経験した際の対処方略について調べた。また、研究者あるいは大学教員の職務のどのような特徴が、私生活とのコンフリクトを生じやすいかについても知見を得た。例えば、育児中の研究者にとって、時間的制約がある中で教育活動と研究活動とを両立させることの困難さが明らかになった。このような時間的制約がある状況においては、仕事(研究)と私生活を両立させる上で、自身や配偶者の親からの育児に対する支援がきわめて重要な要素であることがわかった。また、2020 年春からの新型コロナウイルス感染症の拡大が研究者の仕事・研究活動と私生活にもたらした影響を調べるため、小規模なインタビュー調査を実施した。これらのインタビュー調査から得られた知見はアンケート調査の設計に大いに活かされた。

(2) 女性研究者が経験するワーク・ファミリー・コンフリクトの水準について、研究者と同様に女性比率の低い技術者との比較を実施した。ワーク・ファミリー・コンフリクトには、仕事上の役割によって家庭内の役割が十分に果たせないことを表す「仕事から家庭へ」のコンフリクトと、家庭内の役割によって仕事上の役割が十分に果たせないことを表す「家庭から仕事へ」のコンフリクトの 2 方向がある。データ分析の結果、女性技術者に比べて、女性研究者は、「仕事から家庭へ」のコンフリクトをより強く経験していることが明らかになった。

(3) わが国の研究開発技術者の社会的なネットワークが、仕事と家庭における経験の領域間の流出の一形態を表す「ワーク・ファミリー・ポジティブスピルオーバー」にもたらす効果の性差について検証した。データ分析の結果、男性に比べて、女性は「家庭から仕事へ」および「仕事から家庭へ」のいずれのポジティブスピルオーバーを高い水準で経験していることがわかった。さらに、同居以外の親族や友人との家事や育児における関わり合いがポジティブスピルオーバーにもたらす効果には性差があり、女性に比べて男性のほうが強いことが明らかになった。この点は、その後の本研究の遂行に新たな視点をもたらした。この結果をまとめ、2021 年にオンラインで開催された国際学会で発表した。

(4) 所属学会の年次大会において、大学院生や若手研究者向けに若手研究者のキャリア形成と育児との両立をテーマとするセッションを共同で企画し、話題提供者として本研究およびこれまでの関連する研究から得られた知見を紹介した。セッションを通して、若手研究者のキャリア形成と育児との両立については、当事者および将来的にそれらを経験する可能性のある若手研究者からの関心が非常に高く、本研究テーマの重要性をあらためて実感した。

本研究の遂行を通して、キャリアの初期段階と私生活における家族形成期が重なることにより、特に女性研究者が仕事・研究活動と私生活を両立させるためにさまざまな対処をしていることが明らかになった。また、女性研究者が仕事・研究と私生活での役割間での葛藤を経験するとともに、それらにおける相乗効果も経験していることを明らかにできたことは重要な示唆といえる。さらに、特にわが国の研究者としての典型的なキャリアパスのスタートである任期付き研究者のキャリア継続および組織的な支援の重要性をあらためて認識したため、今後の研究の展開に活かしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 篠原さやか	4. 巻 722
2. 論文標題 女性研究者のキャリア形成とワーク・ライフ・バランス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本労働研究雑誌	6. 最初と最後の頁 4-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 篠原さやか・藤本哲史	4. 巻 7
2. 論文標題 女性研究者・技術者のワーク・ファミリー・エンリッチメントに関する探索的研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学 愛知淑徳大学論集 - グローバル・コミュニケーション学部篇	6. 最初と最後の頁 35-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Sayaka Shinohara & Tetsushi Fujimoto
2. 発表標題 Gender differences in work-family conflict and work-family enrichment for STEM researchers and engineers in Japan
3. 学会等名 Network Gender & STEM Conference 2021（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sayaka Shinohara & Tetsushi Fujimoto
2. 発表標題 Gender Differences in the Impact of Social Network on Work-family Positive Spillover for Japanese Engineers
3. 学会等名 116th American Sociological Association Virtual Annual Meeting（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 篠原さやか・藤本哲史
2. 発表標題 女性研究者のワーク・ファミリー・コンフリクトに関する研究 ～女性研究開発技術者との比較から～
3. 学会等名 経営行動科学学会 第22回年次大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

「若手研究者のキャリア形成、研究と子育ての両立について」経営行動科学学会第25回年次大会（2022年10月）大学院生・若手研究者（ECR）セッション 話題提供

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関